

修士論文題目 (2022年度修了者)

現代社会文化研究科 国際教養学専攻

芥川龍之介文学における抵抗精神 -『地獄変』『桃太郎』『河童』を通して

呉 麗 珍 (WU Lizhen)

修士論文要旨 (2022年度修了者)

現代社会文化研究科 国際教養学専攻

芥川龍之介文学における抵抗精神 -『地獄変』『桃太郎』『河童』を通して

呉 麗 珍 (WU Lizhen)

芥川龍之介は大正時代の十五年間にもっとも活躍した文学者（文士）と言えよう。そこで、芥川の代表作である『地獄変』『桃太郎』『河童』を通して、芥川文学の特質を考察したい。本研究では、特に芥川文学に見られる時代や社会への抵抗精神に焦点を定める。

『地獄変』は、芥川龍之介が大阪毎日新聞社との社友契約により発表した第一作である。本研究では、大殿と良秀の関係に注目しながら、なぜ娘が焼き殺されたのかを考察し、『地獄変』における悲劇とその原因を明らかにする。そして、それが権力者の横暴によるものであり、その横暴に対して、主人公良秀が、どのように対峙するのかを考察する。そして原典にはない、権力者の意にそわないという芸術家の一貫した対峙性から、芥川の抵抗精神への肯定的で確かな態度が示されていることを論証する。

芥川の『桃太郎』は他の作品と全く異なる。有名な民話としての「桃太郎」は、「時代時代の思潮の波風を受けて変容を続けた」と滑川道夫が『桃太郎像の変容』で紹介し、桃太郎の成り立ちから、桃太郎像の変遷を整理した。昭和期に入った後、桃太郎の物語は、更に帝国日本のプロパガンダにより改編され、悪用された。侵掠行為を不当と思わせない当時の社会の風潮に逆らい、「桃太郎を侵略者として風刺」した芥川龍之介は、「桃太郎」を英雄化した当時の日本社会を批判している。そして、そこには、時代に対する芥川の抵抗精神が示されていると考えられる。

『河童』は昭和2年、雑誌『改造』3月号に発表された小説である。芥川の最晩年の代表作とも言える小説として、読者や研究者たちに注目されている。芥川の「河童」への関心と愛し

さは明らかであろう。こうした「河童」への愛着が、『河童』創作への源となっている。俗事に絡まれたまま芥川は、創作に没頭することで一息ついたであろう。それに心境が影響されたことも、芥川の友人への書簡から容易にわかる。「河童はあらゆるものに対する、——就中僕自身に対するデグウから生まれました。」(吉田泰司宛、昭2.4.3)と芥川自身は記している。

人間世界とは「逆」な河童世界を描いていると標榜しつつ、人間世界では茶飯事のことを誇張的に描くことで、人間世界の「あらゆる社会問題」を批判している。この方法によって、『河童』は、当時の社会を鋭く批判する芥川の反抗精神が歴然と表象されている作品だと認められる。

このように、芥川は作品を創作するなかで、当時の社会の矛盾点を具体的に認識し、それへの批判を強めていったのではないかと思われる。この三作品の展開から、大正時代の国の支配階層や、政治的な仕組みのあり方を芥川は意識し、それへの批判を作品に描いていったのだと考えられる。

そして、このことは、芥川の文学が、芸術至上主義的で理知的なものであるだけでなく、社会への抵抗精神を強く有したものであることを明らかにしたものである。